奥飛鳥における文化的景観の形成
－飛鳥川上流域の考古学研究を中心に－

相原　嘉之

Ⅰ．はじめに

明日香村大字稲渕より南の飛鳥川上流域は、一般に「奥飛鳥」と呼ばれている。この地域を遡り、芋峠を越えると、吉野川へとでる。『日本書紀』などの史料によると、７世紀には吉野宮（宮滝）への重要な古道であったことがわかる。しかし、現在は飛鳥川の情緒ある風景、棚田の景観、綱掛神事の民俗儀礼など、飛鳥地域でも独特な景観を形成している。これらの景観は「文化的景観」として捉えることができる。しかし、このような景観は飛鳥時代からすでに形成されていたわけではなく、1300年の歴史の中で形成されていったと推定される。本稿ではこの地域における考古学的調査を中心に、奥飛鳥の形成過程を素描してみたい。しかし、この地域での発掘調査の事例は少なく、遺跡だけではその変遷を解明することはできないが、奥飛鳥の文化的価値を探る基礎資料としたい。

Ⅱ．奥飛鳥の地理的特質

今回検討の対象とするのは、飛鳥川上流域にあたる大字阪田・稲渕・栢森である。飛鳥川は、竜門山地竜在峠の北西にある明日香村大字畑付近に端を発した畑谷川から始まる。途中で男淵や女淵があり、栢森で入谷方面からの寺谷川が合流し、その合流点付近に加夜奈留美命神社が鎮座している。さらに芋峠方面からの行者の川を合わせて、その渓流も次第に豊富な水量となり、稲渕方面へと流れる。このあたりから冬野川と合流するまでを稲淵川と称する。栢森のカンジョナワを潜り、飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社を超えたあたりで、柳谷川が合流して流れる。稲渕カンジョナワを潜り、棚田の横をすり抜けると、祝戸で細川谷を流れる冬野川と合流して飛鳥川となる。その後、飛鳥の中心部を北西に流れ、甘樫丘を東から北へ回り込んで、さらに北西に流れる。磯城郡川西町で大和川に合流する延長20数kmの河川である。

Ⅲ．古記録にみる飛鳥川上流域

『日本書紀』『続日本紀』にみる奥飛鳥

奥飛鳥の地域が記録に現れるのは、『日本書紀』の用明２（587）年である。鞍部多須奈が天皇のために出家して丈六仏と寺院を建立したとされる。この寺こそ南淵の坂田寺と言われている。類似の記事が推古14（606）年にもあり、そこには鞍作鳥が天皇のために金剛寺、すなわち南淵の坂田尼寺を建立したとされる。記録による坂田寺の建立時期については上記の２説があるが、鞍作氏が飛鳥時代初めに坂田寺を建立したことは間違いない。そしてその場所が「南淵」と呼ばれ、現在の大字祝戸・阪田にある坂田寺跡がこれにあたる。

次に記録に現れるのは、皇極元（642）年で、天皇自らが南淵の河上で四方を拝んで、雨乞いをしたとある。そこに記される「南淵の河上」の位置は特定出来ないが、一説には、稲淵・栢森の境に式内社の飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社があり、その直下には「宇須瀧」や「ハチマンダム」と呼ばれており、ここが雨乞いの地ではないかとする。また、南淵請安の邸宅も奥

飛鳥に推定される。大化改新で活躍した南淵請安は推古16（608）年に隋へ渡り、舒明12（640）年までの30年間に大陸で学んできた。その邸宅は、その名前からも伺えるように「南淵」にあるとされる。中大兄皇子と中臣鎌足は南淵請安の邸宅までの道中で、密談を交わしていたとされる。

天武５（676）年には「「南淵山・細川山を禁めて並に蒭薪ること莫れ。又畿内の山野の、元より禁むる所の限に、妄に焼き折ること莫れ」とのたまふ。」とある。この「南淵山」「細川山」の地域が課題となるが、先の坂田寺が「南淵」に含まれることから、南淵は阪田から上流と考えられ、現在の大字稲渕も「南淵」の転化したものと考えられている。一方、「細川」は現在でも細川谷の北側に大字細川があることから、冬野川（細川）右岸と考えられる。よってこの記事は嶋宮より上流の飛鳥川・冬野川に沿う広範囲で山野の確保がなされたことになる。

『続日本紀』の延暦２（783）年の記事によると、天平14（742）年には藤原田麻呂が蜷淵（になふち）（南淵の別称）に隠遁し、蜷淵大臣と呼ばれた記事が記されている。藤原田麻呂は藤原宇合の第五子で、天平12（740）年に兄広嗣の乱で隠岐に配流された。同14（742）年に召還されて稲淵で仏教の修行に務めた。このことから奈良時代中頃に、藤原田麻呂の別業が南淵地域に存在していたと推定される。

『万葉集』にみる奥飛鳥

『万葉集』には飛鳥川を読んだ歌が24首ある。そのうち20首は「明日香川（河）」であり、「飛鳥川」は２首しかない。残りの２首（巻14－3545、巻19－4258）は東歌の中で出てくるので、大和以外の所と推定されている。また、巻10-210にある「明日香川黄葉流る……」の歌は、河内の飛鳥川という説が有力である。

この「飛鳥川」の詠まれる歌は、恋人や亡き人を偲ぶ「恋歌」「挽歌」などが多い。ここでは、万葉集から伺うことのできる飛鳥川の景観について考えてみたい。

飛鳥川の水量は時によって大きく変わる。巻２－197「明日香川　しがらみ渡し　塞（せ）かませば　流るる水も　のどにかあらまし」や巻６－969「……神名火の　淵は浅せにて　瀬にかなるらむ」では水量によって、淵と瀬が直ぐに変わったり、巻10－1878「……明日香川　瀬瀬ゆ渡しし　石走もなし」などからは石橋が増水によって隠れることがあったことがわかる。このような変化が、後の無常観に繋がっていったのであろう。巻２－194「飛鳥　明日香の河の上つ瀬に　生ふる玉藻は　下つ瀬に　流れ触らばふ　玉藻なす　か寄りかく寄り　靡合（なびか）ひし…」や巻３－325「明日香河　川淀さらず　立つ霧の……」などからは、淀や瀬が多く詠まれており、平常の水量は多くない。しかし変化に富んだ地形と流れの速い水流であったことがわかる。また、玉藻も多く詠まれており、川の流れに色彩を付けている。そしてこの川は、巻７－1125「清き瀬に　千鳥妻喚ぶ……」からは、飛鳥川が清らかな川であることが伺われ、これは巻４－626の「……故郷の　明日香の河に　潔身しに行く」のように奈良の都から訪れて禊ぎをする川であったことからもわかる。このことは先の皇極元（642）年に南淵の河上で雨乞いをしたとする『日本書紀』の記事とも符合する。

この飛鳥川にかかる「橋」を詠みこんだ歌もいくつかある。「石橋」と「橋杙（はしぐい）」である。「石橋」とは川の浅瀬に石を幾つか並べ置き、橋とするもので、橋と島庄間にも近年まで存在し、現在は稲渕に「飛び石」として残る。これに対して、「橋杙」は深く川幅の広い場所で杭を打ち橋桁を渡して、橋板を張るものである。巻２－196に「飛ぶ鳥の　明日香の川の　上つ瀬に　石橋渡し……」とあり、飛鳥川の上流は石橋、下流は板橋であったと考えられる。この違

【関連文献】

「奥飛鳥」に関わる『日本書紀』『続日本紀』[1)]

『日本書紀』用明2（587）年4月

「終せたまひなむとする時に、鞍部多須奈、司馬達等が子なり。進みて奏して曰さく、「臣、天皇の奉為に、出家して修道はむ。又丈六の佛像及び寺を造り奉らむ」とまうす。天皇、為に悲び慟ひたまふ。今南淵の坂田寺の木の丈六の佛像・挾侍の菩薩、是なり。」

『日本書紀』推古14（606）年5月戊午（5日）

「（略）因りて近江國の坂田郡の水田二十町を給ふ。鳥、此の田を以て、天皇の為に、金剛寺を作る。是今、南淵の坂田尼寺と謂ふ」

『日本書紀』皇極元（642）年8月（1日）

「天皇、南淵の河上に幸して、跪きて四方を拝む。天を仰ぎて祈ひたまふ。即ち雷なりて大雨ふる。遂に雨ふること五日。溥く天下を潤す。或本に云はく、五日連に雨ふりて、九穀登り熟めりといふ。是に、天下の百姓、俱に稱萬歳びて曰さく、「至徳ましますの天皇なり」とまうす。」

『日本書紀』皇極3（645）年正月（1日）

「（前略）後に他の頻に接はることを嫌はむことを恐りて、俱に手を黄巻を把りて、自ら周孔の教を南淵先生の所に学ぶ」

『日本書紀』白雉4（653）年

「皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、并て皇弟等を率て、往きて倭飛鳥河邊行宮に居します。」

『日本書紀』天武5（676）年5月

「是の月に、勅すらく、「南淵山・細川山を禁めて並に芻薪ること莫れ。又畿内の山野の、元より禁むる所の限に、妄に焼き折ること莫れ」とのたまふ。」

『続日本紀』延暦2（786）年3月（19日）

「（前略）天平十二年、兄広嗣が事に坐せられて隠岐に流さる。十四年、罪を宥されて徴し還さる。蜷淵山の中に隠居して時の事に預らず。敦く釈典に志して、行を脩むることを務とす。」

「飛鳥川」に関わる『万葉集』[2)]

『万葉集』巻2－194「飛鳥の　明日香の河の　上つ瀬に　生ふる玉藻は　下つ瀬に　流れ触らばふ　玉藻なす　か寄りかく寄り　靡合ひし　嬬の命の　たたなづく　柔膚すらを　剣刀　身に副へ寝ねば　ぬばたまの　夜床も荒るらむ　そこ故に　慰めかねて　けだしくも　逢ふやと思ひて　玉垂の　越智の大野の　朝露に　玉裳はひづち　夕霧に　衣は沾れて　草枕　旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ」

『万葉集』巻2－196「飛鳥の　明日香の河の　上つ瀬に　石橋渡し　下つ瀬に　打橋渡す　石橋に　生ひ靡ける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひををれる　川藻もぞ　枯るればはゆる　何しかも　わが王の　立たせば　玉裳のもころ　臥せば　川藻の如く　靡かひし　宜しき君が　朝宮を　忘れ給ふや　夕宮を　背き給ふや　うつそみと　思ひし時　春べは　花折りかざし　秋立てば　黄葉かざし　敷栲の　袖たづさはり　鏡なす　見れども飽かず　望月の　いやめづらしみ　思ほしし　君と時々　幸して　遊び給ひし　御食向ふ　城上の宮を　常宮と　定め給ひて　あぢさはふ　目言も絶えぬ　然れかも　あやに悲しみ　ぬえ鳥の　片恋嬬　朝鳥の　通はす君が　夏草の　思ひ萎えて　夕星の　か行きかく行き　大船の　たゆたふ見れば　慰むる　情もあらぬ　そこ故に　せむすべ知れや

音のみも　名のみも絶えず　天地(あめつち)の　いや遠長く　偲ひ行かむ　み名に懸かせる　明日香河　萬代(よろづよ)までに　愛しきやし　わが王(おほきみ)の　形見かここを」

『万葉集』巻２－197「明日香川　しがらみ渡し　塞(せ)かませば　流るる水も　のどにかあらまし」

『万葉集』巻２－198「明日香川　明日だに見むと　思へやも　わが王(おほきみ)の　御名忘れせぬ」

『万葉集』巻３－325「明日香河　川淀さらず　立つ霧の　思ひ過ぐべき　戀にあらなくに」

『万葉集』巻３－356「今日もかも　明日香の川の　夕さらず　河蝦(かはず)鳴く瀬の　清(さや)けかるらむ」

『万葉集』巻４－626「君により　言(こと)の繁きを　故郷の　明日香の川に　潔身(みそぎ)しに行く」

『万葉集』巻７－1126「年月も　いまだ経なくに　明日香川　瀬瀬ゆ渡しし　石橋も無し」

『万葉集』巻７－1366「明日香川　七瀬の淀に　住む鳥も　心あれこそ　波立てざらめ」

『万葉集』巻７－1379「絶えずゆく　明日香の川の　淀めらば　故しもあるごと　人の見まくに」

『万葉集』巻７－1380「明日香川　瀬瀬に玉藻は　生ひたれど　しがらみあれば　靡(なび)きあはなくに」

『万葉集』巻８－1557「明日香川　行き廻る岳の　秋萩は　今日降る雨に　散りか過ぎなむ」

『万葉集』巻10－1878「今行きて　聞くものにもが　明日香川　春雨降りて　激(たぎ)つ瀬の音を」

『万葉集』巻10－2210「明日香川　黄葉(もみちば)流る　葛城の　山の木の葉は　今し散るらむ」

『万葉集』巻11－2701「明日香川　明日も渡らむ　石橋の　遠き心は　思ほえぬかも」

『万葉集』巻11－2702「飛鳥川　水行き増り　いや日けに　戀の増らば　ありかつましじ」

『万葉集』巻11－2713「明日香川　行く瀬を　速み早けむと　待つらむ妹を　この日暮しつ」

『万葉集』巻12－2859「飛鳥川　高川避(よ)かし　越ゑ来しを　まこと今夜は　明けずも行かぬか」

『万葉集』巻13－3227「葦原の　瑞穂の國に　手向(たむけ)すと　天降(あも)りましけむ　五百萬(いほよろづ)　千萬(ちよろづかみ)神の　神代より　言ひ継ぎ来る　神名火の　三諸の山は　春されば　春霞立ち　秋行けば　紅にほふ　神名火の　三諸の神の　帯にせる　明日香の川の　水脈(みをはや)速み　生ひため難き　石枕　蘿(こけ)生すまでに　新夜(あらたよ)の　さきく通はむ　事計(ことはかり)　夢に見せこそ　剣刀(つるぎたち)　斎(いは)ひ祭れる　神にし坐せば」

『万葉集』巻13－3266「春されば　花咲きををり　秋づけば　丹(に)の穂にもみつ　味酒(うまさけ)を　神名火山の　帯にせる　明日香の川の　速き瀬に　生ふる玉藻の　うち靡(なび)き　情(こころ)は寄りて　朝露の　消なば消ぬべく　戀ふらくも　しるくも逢へる　隠妻(こもりづま)かも」

『万葉集』巻13－3267「明日香川　瀬瀬の珠藻の　うち靡き　情(こころ)は妹に　寄りにけるかも」

『万葉集』巻14－3544「明日香川　下濁れるを　知らずして　背ななと二人　さ寝て悔しも」

『万葉集』巻14－3545「明日香川　塞くと知りせば　数多夜(あまたよ)も　率寝て来ましを　塞くと知りせば」

『万葉集』巻19－4258「明日香川　川戸を清み　後れ居て　戀ふれば京(みやこ)　いや遠そきぬ」

「南淵」に関わる『万葉集』

『万葉集』巻７－1330「南淵の　細川山に　立つ壇(まゆみ)　弓束(ゆづか)纏くまで　人に知らえじ」

『万葉集』巻９－1709「御食(みけ)向かふ　南淵山の　巌(いはほ)には　落(ふ)りしはだれか　消え残りたる」

『万葉集』巻10－2206「眞澄(ま そ)鏡　南淵山は　今日もかも　白露置きて　黄葉(もみち)散るらむ」

「朝風」に関わる『万葉集』

『万葉集』巻１－75　「宇治(うぢ)間山(まやま)　朝風寒し　旅にして　衣貸すべき　妹(いも)もあらなくに」

「朝風」に関わる『長屋王家木簡（ＳＤ4750)』[3)]

・「旦風来人米一升」「□□」(340)

・「移　務所　立薦三枚　旦風悔過布施文右二種今急進」
「大炊司女一人依斉会而召　遣仕丁刑部諸男　二月廿日家令」(木簡概報21－23)

「竹野皇女」に関わる『長屋王家木簡（ＳＤ4750)』

・「竹野王子大許進米三升　受稲積」「六日百嶋」(7)

・「竹野□子大許進米□□」(246)

・「竹野王子進□」「□」(247)

・「竹野王□」(248)

・「竹野皇子二取米三升　余女」(1827)

・「竹野王子進米一升大津　八月三日　甥万呂　家令□」「吉佐良十口　□」(1828)

・「竹野王子山寺遣雇人米二升□□□」「古万呂　十月八日□万呂家令」(1829)

・「竹野」(2415)

・「竹野王」(2416)

・「□女子　竹野王子宮」(3013)

・「勇勇　年□　竹野王子宮　勇麻　□」(3019)

・「□益女　竹野王宮」(3022)

・「年十三　竹野王子宮」(3023)

・「竹野王子宮」(3026)

・「□野王□」(3027)

・「□竹野」(3576)

・「竹野」(3577)

・「竹野王子御所進粥米二升受老」「九日　萬呂」(木簡概報21－118)

・「竹野王子御服粉米二升　受私部老　十二月廿四日稲虫」(木簡概報21－119)

・「竹野王子御所進米一升　受大津」「十二月五日　廣嶋」(木簡概報21－120)

・「竹野王子女医二口」「一升半受真木女」(木簡概報23－40)

・「竹野王子□医一口既母万呂　□□飯米二升□　九月七日」(木簡概報25－82)

・「竹野王子進米一升半受尾張女　三月十六日」(木簡概報27－53)

・「進竹野王子御所米一升受古奈良女　九月廿七日石角」(木簡概報27－54)

・「竹野王御□米一升　御所人給米三升七合五夕　□　□月十八日　□□」(木簡概報27－55)

・「竹野王子御所米一升」(木簡概報28－96)

いは川幅と水量、そして飛鳥川周辺の（都市）景観の違いであると考えられる。

また、『万葉集』には「南淵山」にかかる歌が3首詠まれている。巻7－1330によると南淵山には弓などの材料になる真弓が生えている景観が伺われる。

これらの『万葉集』から飛鳥川の景観をみると、祝戸より下流域では、川幅も広く水量豊かな川の流れが想像でき、そこには木製の橋が架けられ宮殿・寺院が建ち並ぶ姿が想起される。これに対して、上流域では川幅は狭く、両側には山が迫った急流で、石橋が据えられ山々には樹木が茂っていた景観が復元できる。

巻9－1709の歌は弓削皇子に献る歌で、この歌から弓削皇子が南淵山の近くに居住していたことが伺われる。

『万葉集』には、後にみる「朝風」にかかわると考えられる歌もある。巻1－75「宇治間山　朝風寒し　旅にして　衣貸すべき　妹もあらなくに」である。これは文武天皇が大宝元年2月の吉野行幸時に長屋王が詠んだと考えられており、ここにみえる「宇治間山」は吉野町千股に比定されている。つまり芋峠越の吉野路の途中であるが、ここにある「朝風」が実景を詠んだ可能性もあるが、「朝風」の地名とかけているのであろう。

『長屋王家木簡』にみる奥飛鳥

平城京長屋王家木簡の中に、「朝風」「竹野王」に関わる木簡が数点出土している。

「移　務所　立薦三枚　旦風悔過布施文右二種今急進」「大炊司女一人依斉会而召　遣仕丁刑部諸男　二月廿日家令」（木簡概報21－23）は、吉備内親王家側から長屋王家側に出した移で、立薦と旦風悔過布施文を急いで送れ、また大炊司の女一人を斎会のために召し出すという指示を伝えたものである。また、「旦風来人米一升」（340）は、朝風（旦風）から来た人に米一升を支給したことを示す伝票木簡である。そして、「竹野王子御所進粥米二升受老」（木簡概報21－118）も竹野王子の御所に米を支給した伝票木簡である。さらに「竹野王子山寺遣雇人米二升□□□」（1829）には、竹野王の山寺があったことが記されており、これこそ朝風の地にあった寺院と考えられる。

「竹野王石塔」にみる奥飛鳥

銘文は長年の風雪によって、文字が不明確になっているが、「昔、阿育（聖）王、八万四千の塔を閻浮に遍し……」で始まり、古代インドの朱雀王朝の阿育王が仏舎利を分けた84000塔を全世界に建てさせたことを述べている。故事は広く中国・朝鮮・日本にも伝わっている。また、中程には「朝風南葬談武之峯[4]北……」とあり、「朝風」の地に建立されたことがわかる。また、最後に記される「従二位竹野王」は長屋王家木簡にもみえる竹野王（竹野女王・竹野王子・竹野皇子）と同一人物で長屋王近親の女性と考えられる。

Ⅳ．飛鳥川上流域の発掘調査成果

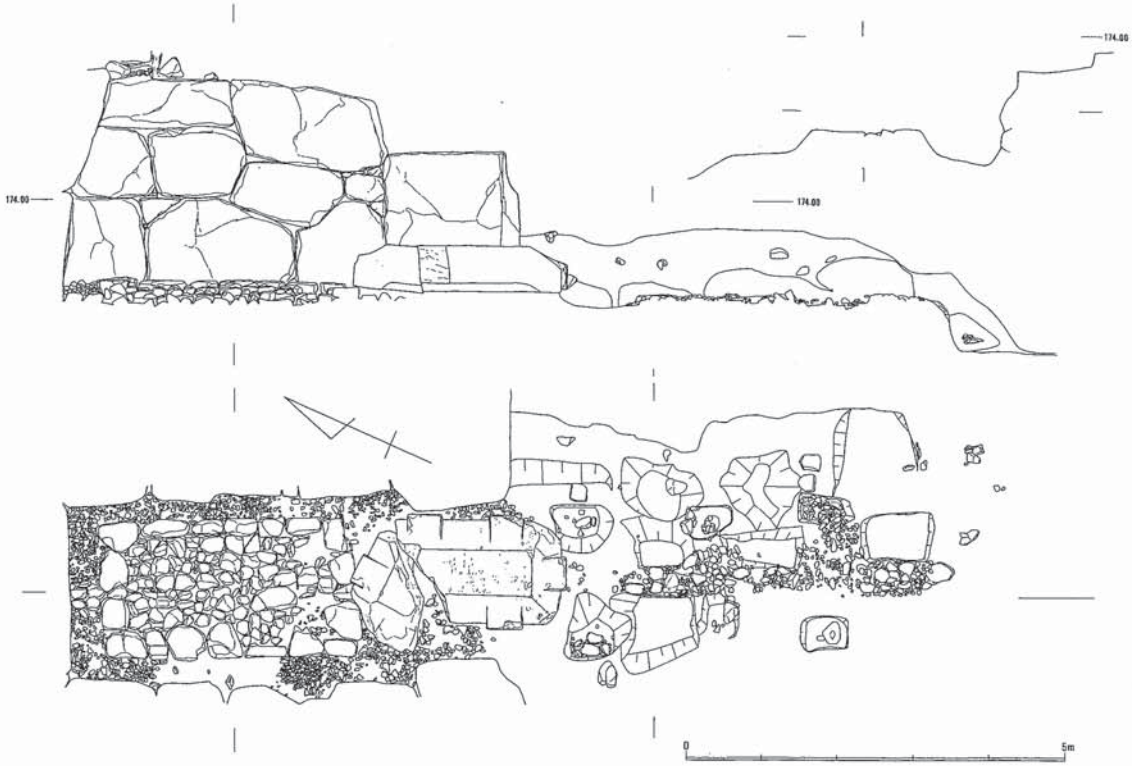
飛鳥川上流域での発掘調査の実施箇所は多くない。ここでは、これまでに調査された箇所についての、調査成果の整理をしておきたい。

坂田寺跡　飛鳥川右岸にある坂田寺は、『日本書紀』によると鞍作鳥が建立した寺院とされ、7世紀後半には五大寺のひとつにあげられている。飛鳥時代の伽藍は未確認であるが、7世紀初頭から藤原宮期の瓦が出土することから、造営の継続あるいは補修がなされていたものと考えられる。奈良時代には信勝尼が住居しており、奈良時代前半に、大規模な造営が行われ、伽藍が整備されていったが、10世紀になると寺勢は衰え、かなり荒廃した状態であった。そして

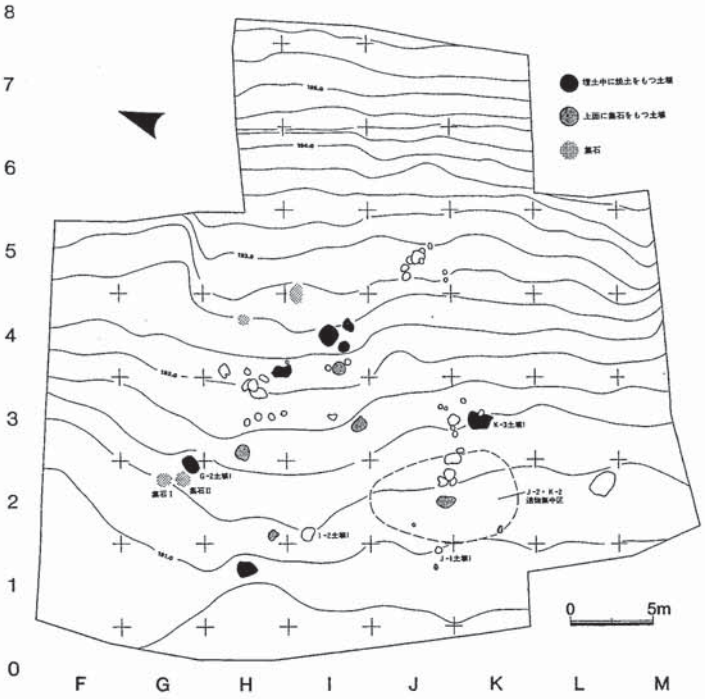
10世紀後半に土砂崩れで伽藍は倒壊している。その後、15世紀には伽藍地が水田となっていたことが、発掘の成果からわかる。奈良時代の伽藍は西面する金堂とこれに取り付く回廊が60m四方を取り囲む。中門は金堂の対面にはなく北面回廊に推定される。回廊内側には少なくとも基壇建物が2棟あり、金堂の背面にも鎮壇具を出土する建物がある。伽藍北側にも施設があり、寺院を支える施設群が展開する。出土遺物は7世紀から平安時代までの土器・瓦が中心であるが、縄文時代後期中葉の元住吉山Ⅰ式の縄文土器（明日香村1998）や布留式でも古相の古式土師器（安達・木下1974）の出土もみられる。

稲淵宮殿跡　飛鳥川の左岸辺にコンパクトにまとまった宮殿遺跡である。四面庇の正殿とその東脇殿、後殿と東脇殿、そして石敷広場で構成されている。東脇殿と対称の西脇殿が想定され、石敷広場を中心に二重コ字形の建物配置をしている。建物の方位は北から大きく振れており、飛鳥川とフグリ山に挟まれた地形に限定されたものと考えられるが、整然とした建物配置で、柱筋が揃い企画性が高いこと、石敷の広場を有すること、瓦が出土しないことから、飛鳥の宮殿中心部の特色を端的にもつ。これら建物の築造時期は7世紀中頃で、7世紀末頃には廃絶したと考えられることから、『日本書紀』白雉4年の「倭飛鳥河辺行宮」の可能性が高い（奈文研1977）。

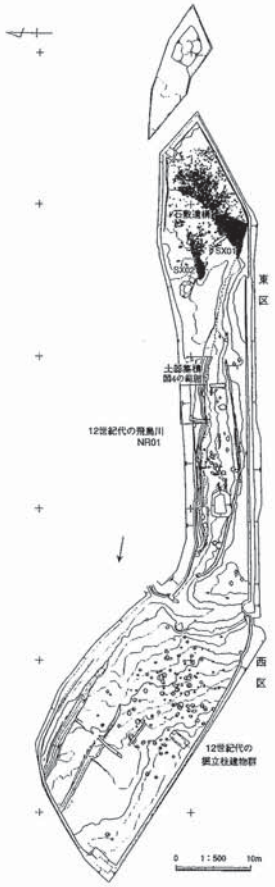
稲淵遺跡（松ケ崎地区）　飛鳥川左岸の飛鳥稲淵宮殿跡から上流約100～300mの範囲で9カ所に調査区を設定した。このなかで遺構が確認出来たのは、稲淵宮殿跡から300m離れた調査区でバラス敷を検出している。このバラスは少なくとも600m²にも広がることがわかっており、その施工は7世紀中頃で、7世紀後半まで使用されていたことがわかる。また柱穴群の一部が確認されており、稲淵宮殿の方位と一致し、炊飯具が多く出土することから、宮殿の上流側に附属施設が展開していた可能性が高い（明日香村2000）。



第1図　塚本古墳

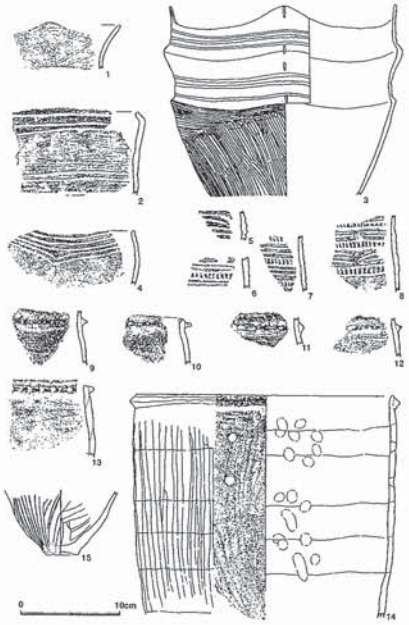


第2図　稲淵ムカンダ遺跡

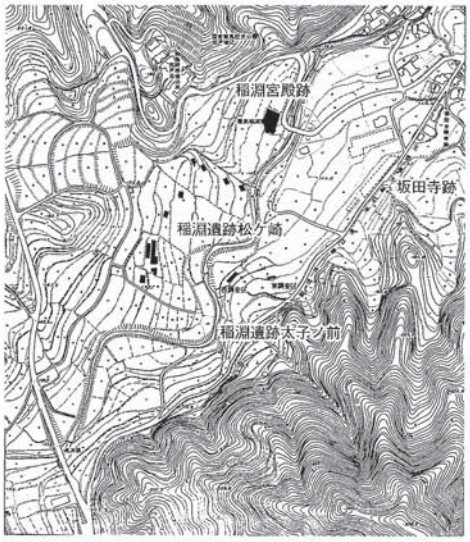


第3図　シロカイト遺跡

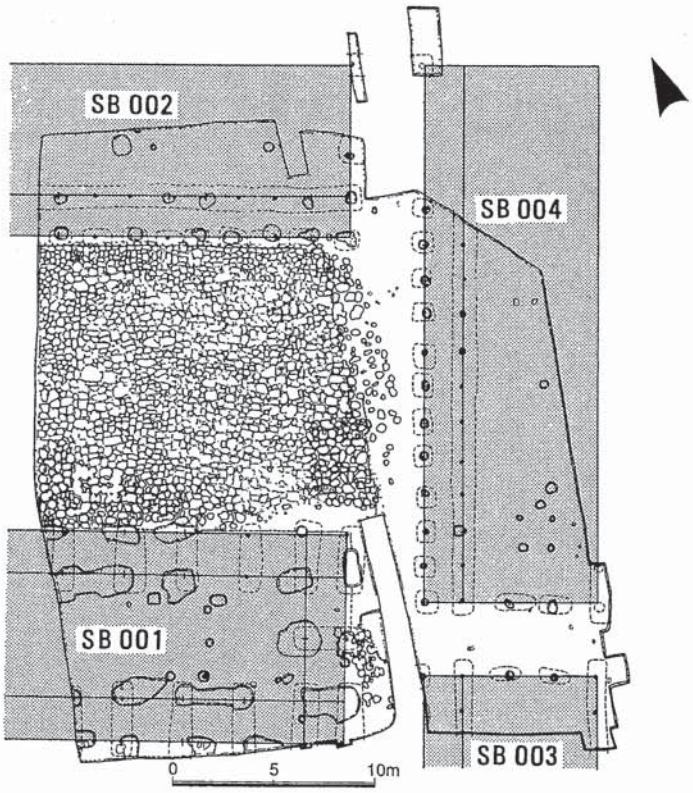
第4図　稲淵ムカンダ遺跡出土縄文土器①



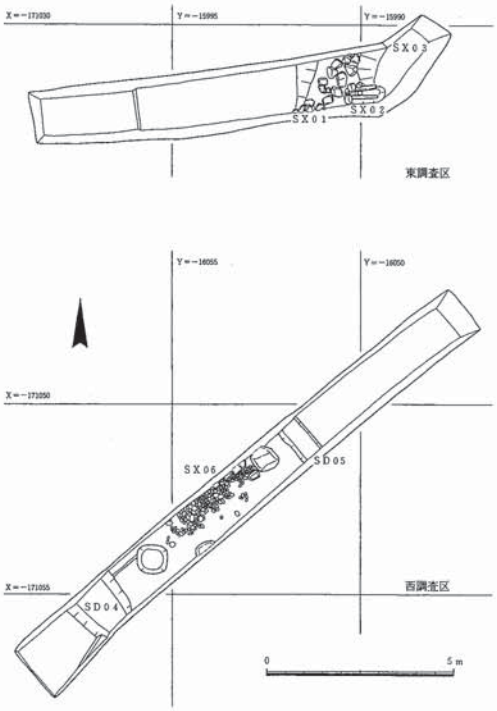
第5図　稲淵ムカンダ遺跡出土縄文土器②



第６図　稲渕地域の調査地

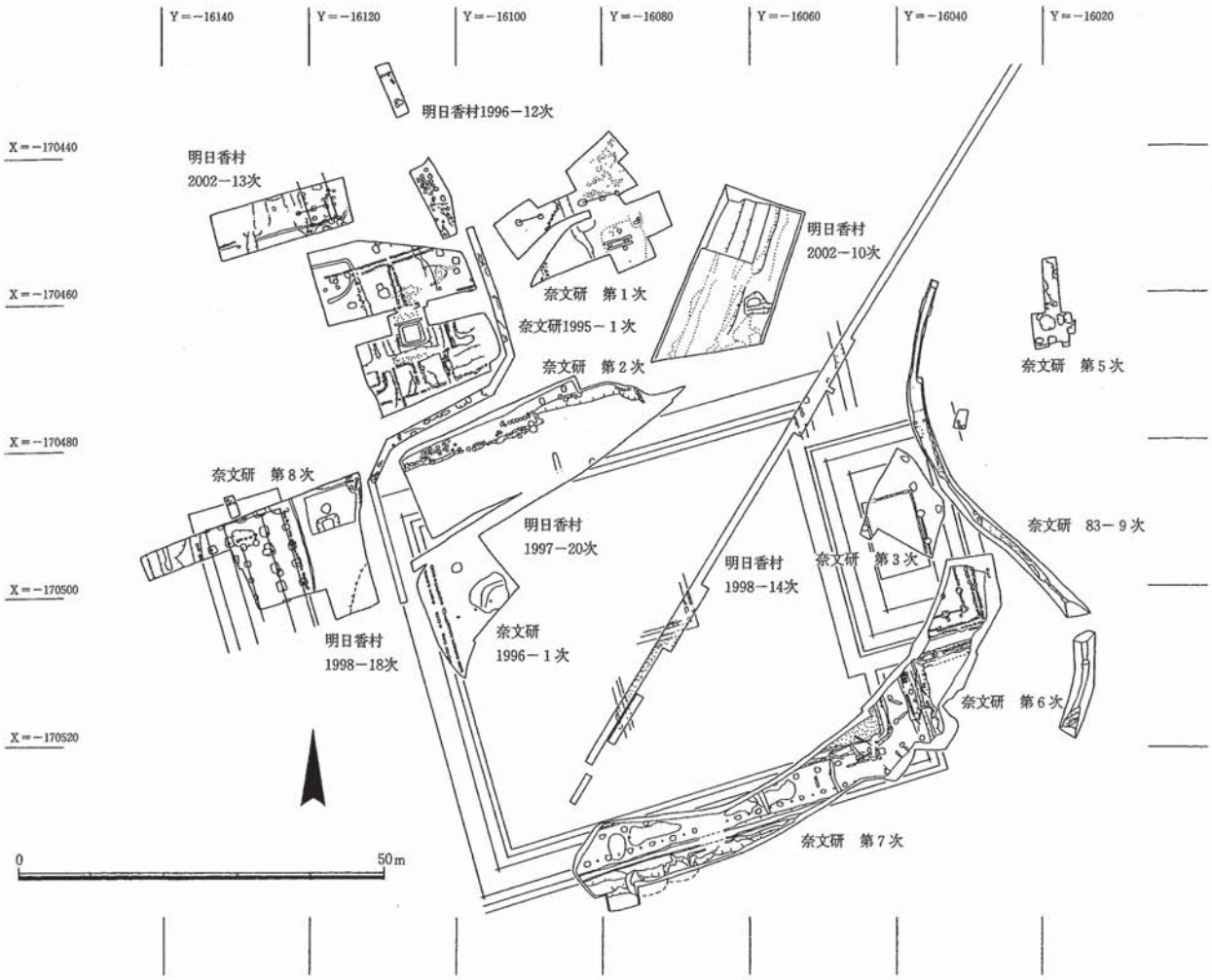


第７図　稲淵宮殿跡

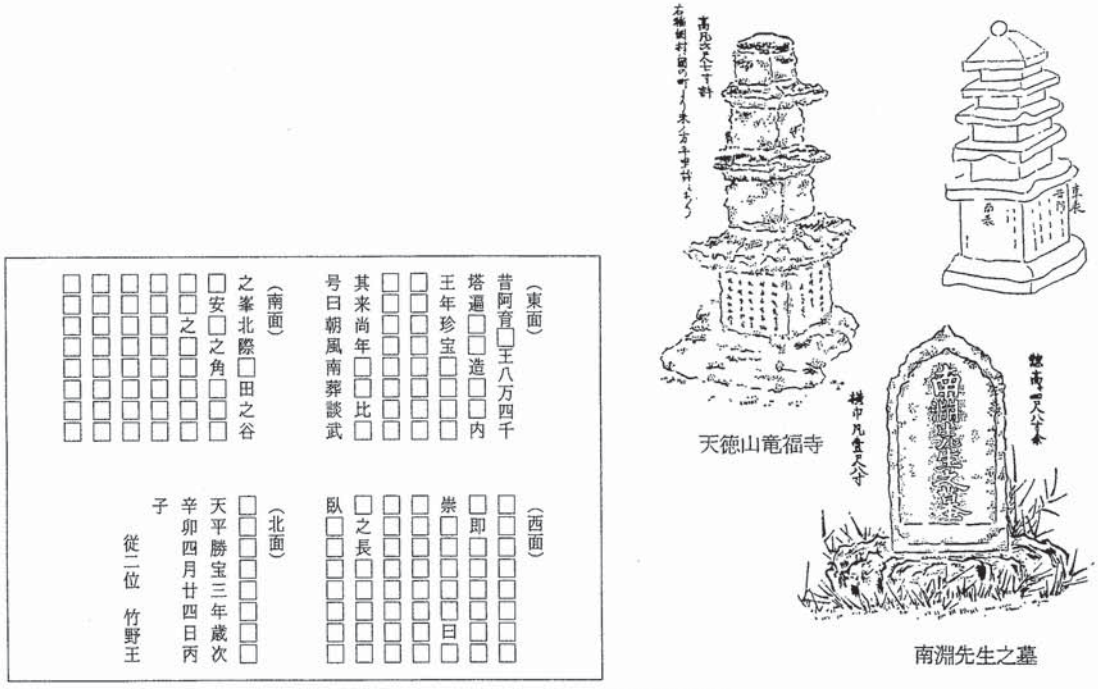


第８図　稲淵遺跡（太子ノ前地区）

第９図　稲淵遺跡（松ケ崎地区）



第10図　坂田寺跡



第11図　竹野王石塔と南淵請安の墓

稲淵遺跡（太子ノ前地区）　飛鳥川右岸の坂田寺から上流300ｍにあたる。飛鳥川が蛇行しており、凸部で小規模な平坦部がみられる。調査は東西２カ所に設定し、東調査区は尾根の延長部とその東の谷部にあたる。尾根の先端部では大規模に整地を行い、木樋を整地土に埋設して、その先端は谷部にだす。整地土内の地下水を排水する役目を負う。この谷は地形図から読み取ると、50ｍちかい谷で坂田寺と区切られている。なお、出土遺物がすくなく、時期を特定できない。一方、西区は尾根の張り出し部にあたる。ここでは地山上に敷かれた５～10㎝大のバラス敷がある。本来は広範囲に敷かれていたものと推定され、７世紀後半から８世紀中頃の時期と考えられる。瓦の出土は極めて少なく、寺院との関係は薄い。その立地や時期からみて、天武・持統天皇や聖武天皇の吉野行幸との関連が注目される（明日香村2002）。

塚本古墳　飛鳥川左岸の稲淵宮殿跡から上流400ｍにあたる。丘陵から東に張り出した尾根にある。墳丘は削平が著しいが、約39ｍ四方の二段築成の方墳と推定できる。石室は両袖式の横穴式石室である。玄室は全長4.6ｍ、幅2.5ｍである。石室内には凝灰岩製の家形石棺の蓋が残されている。石室構造からみて７世紀前半の築造であろう（橿考研1983）。

稲淵朝風遺跡　飛鳥川左岸の上平田から稲淵へ抜ける平田峠（朝風峠）をでたところにあたり、飛鳥川を見下ろす尾根の先端にあたる。周辺は棚田景観が極めて良好に広がっており、風光明媚な場所である。調査区は尾根の上にあたり、表土を除去するとすぐに地山となり、遺物の出土もみられない。かなりの削平を受けているものと考えられる（明日香村2005a）。

稲淵遺跡（シノキタ地区）　飛鳥川右岸の稲渕集落内にあたる。南東100ｍには義淵僧正が創建した岡寺（龍蓋寺）とともに五龍寺のひとつにあげられる龍福寺がある。調査では、深さ２ｍまで掘削したが、シルト層が続き遺物も出土していない。小規模な谷地形であったと考えられる（明日香村2005b）。

稲淵龍福寺　飛鳥川右岸の稲渕集落内にある龍福寺は義淵僧正が創建した岡寺（龍蓋寺）とともに五龍寺のひとつにあげられており、その境内には「竹野王石塔」がある。この石塔は朝風の地から移されたと言われている。調査では地山の落ちを確認しただけであるが、13～14世紀の土師皿・瓦器が出土している。このことから、この頃に寺院の造成がなされたと推定でき、寺院や石塔の移築時期を推定する資料となっている（明日香村2004）。

稲淵ムカンダ遺跡　稲渕集落の南端、龍福寺の南東200ｍの飛鳥川右岸の河川段丘上にあたる。ここでは縄文時代晩期前半と考えられる配石・集石遺構・焼土坑・土坑がある。集石遺構には付近で採石されない石があり、遠方との交流が推定される。土坑には集石を伴ったり、埋甕を持つものもあり、墓壙と考えられる。焼土坑周辺には焼けたドングリが散乱している。

出土遺物には中期前葉から晩期終末までの縄文土器がある。縄文中期前葉の船元Ｉ式は少量であり、確実な遺構を伴っていない。また、後期初頭の中津式や後期前半の土器はまとまった出土をみるが、やはり面的な把握ができていない。後期後半になると、宮滝式の埋甕がみられる。晩期前半には滋賀里式が大量に出土しており、後期後半から晩期前半がこの遺跡の形成期と考えられる。石鏃や石匙・石錘など多数の石器類が出土している。これらの石器から狩猟・漁労・土木・採取などの活動が伺われる。なお、この遺跡では弥生時代の包含層も確認されている（関西大学1987・山口2007）。

シロカイト遺跡（飛鳥川）　稲渕集落と栢森集落の間にあたる飛鳥川の河川敷に調査区を設定した。調査区が河川敷ということもあり、顕著な遺構を確認していないが、土坑やピット、中世の水田・石垣などを検出しているが、その性格を特定できないものが多い。出土遺物には

中津式から四ツ池式の中期後葉から後期後葉の縄文土器、平安前期の緑釉陶器、黒色土器・瓦器などがある。これらの遺構と遺物の出土状況から、縄文時代には栢森集落に接する飛鳥川左岸の北斜面に、稲淵ムカンダ遺跡と同様の立地に営まれた集落が推定される。また、12世紀代の遺物も出土することから、丘陵上に当該期の集落が営まれていた可能性が高い。このうち現河川敷内にも掘立柱建物が建てられていたが、12世紀末頃の洪水によって流されている。その後、中世前半には石積み・礫敷がみられるが、その性格は明らかではない。さらに継続して中世の集落も営まれていたのであろう（橿考研2006・2007）。

Ⅴ．飛鳥川上流域の文化財

ここでは、発掘調査によって確認された遺跡以外の文化財についてみていきたい。それは、石塔であったり、飛び石、神社、民俗儀礼である。

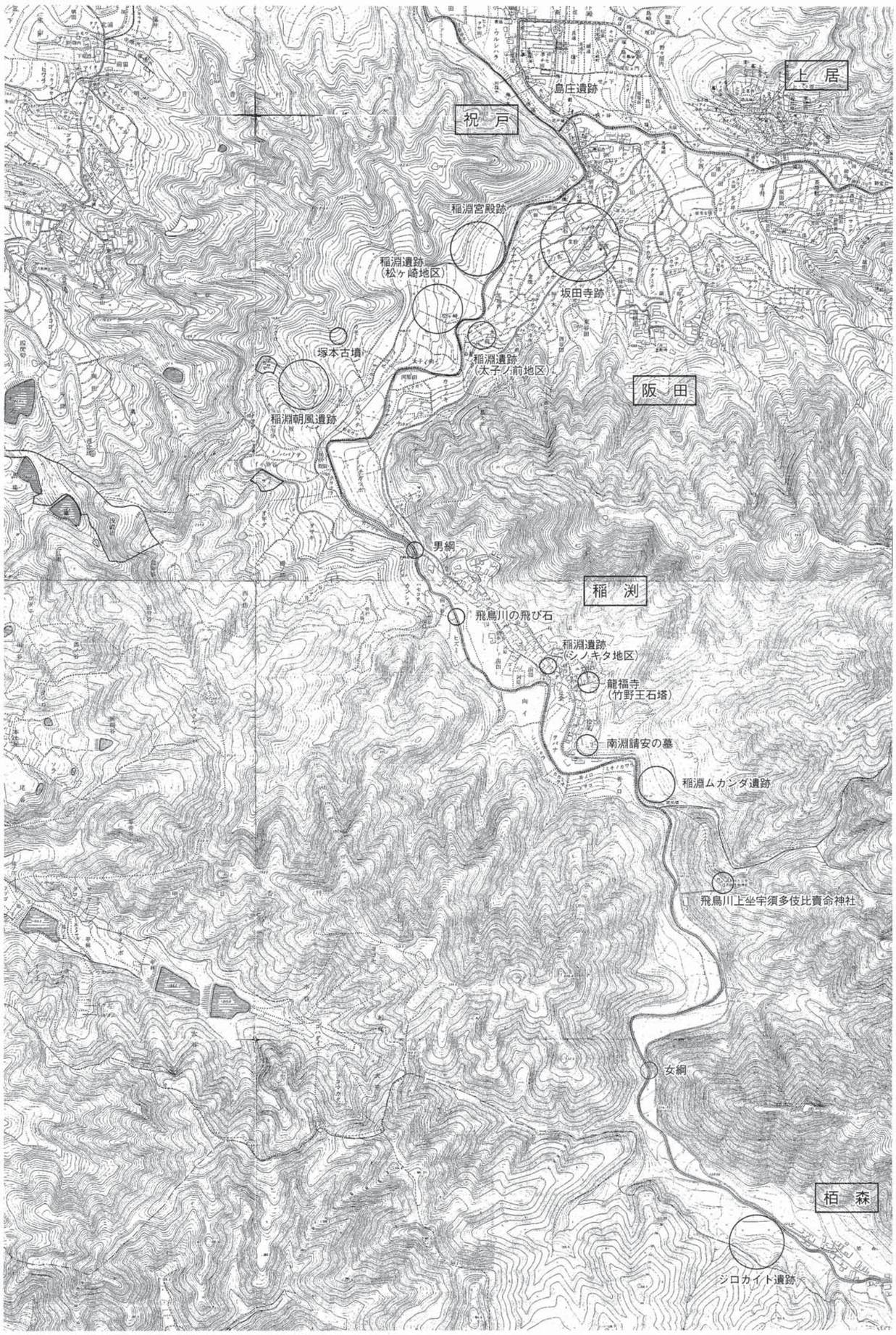
竹野王石塔　飛鳥川右岸の稲渕龍福寺境内にある凝灰岩製の石塔である。現存する高さは約180㎝で、各軸部と屋根を別材で積み上げており、四重目の軸部まで残存する。初重軸部の四面に刻銘がある。銘文は風化が激しく、判読できない箇所も多いが、「昔阿育……」という書き始めで、中程には「朝風南葬談武之峯北……」とあり、末尾には「天平勝宝三年歳次　辛卯四月廿四日丙　子　従二位竹野王」と記す。このことからこの石塔は本来「朝風」の地に天平勝宝３（751）年 に竹野王によって造立されたことがわかる。その地は飛鳥川と檜前川の間の丘陵地とされており、現在でも小字「アサカゼ」が残る。稲渕龍福寺に移建された時期は不明であるが、享保21（1736）年の『大和志』には記録されており、これ以前であることはわかる。さらにその絵図によると、本来は五層石塔であったことがわかる。

南淵請安の墓　飛鳥川右岸の稲渕龍福寺の上流100ｍの、川に面した尾根上に南淵請安の墓がある。南淵請安は推古16（608）年に裴世清を送る隋への使者に含まれた留学生で、その帰国は舒明12（640）年までの30年に渡って大陸で学んできた。その知識は後に大化改新の際に大いに活躍した。現在は稲渕の談山神社に南淵請安の墓とされる明神塚がある。談山神社がこの地に創建された時期については明確ではないが、現存石燈籠の銘文によると安政５（1858）年とあり、少なくともこの頃には神社が鎮座していたと考えられる。また、墓前の石燈籠には寛政３（1791）年の銘文があり、さらに享保21（1736）年の『大和志』にも記録があり、この頃までには、この神社に墓が移されていたものと思われる。ここに移される前は、飛鳥川下流左岸の「朝風」の地にあったとされる。現在その地には「セイサン」と呼ばれる小字名が残されており「ショウアン」との類似が注目されている。

朝風廃寺　この寺の発見は舘野和己の研究に始まる（舘野1992）。舘野氏は長屋王家木簡のうち４点に注目した。

・「移　務所　立薦三枚　旦風悔過布施文右二種今急進」
　「大炊司女一人依斉会而召　遣仕丁刑部諸男　二月廿日家令」（木簡概報21－23）
・「旦風来人米一升」「□□」（340）
・「竹野王子御所進粥米二升受老」「九日萬呂」（木簡概報21－118）
・「竹野王子山寺遣雇人米二升□□□」「古万呂　十月八日□万呂家令」（1829）

これらの木簡から「旦風」は「朝風」と呼び、「竹野王子」とは竹野王石塔にある「竹野王」と同一人物で、『続日本紀』の「竹野女王」を指す。このことから「朝風」の地に竹野王の山寺があったとした。これを受けて大脇潔氏は稲渕と平田の間に横たわる丘陵に小字「アサカゼ」



第12図　奥飛鳥地域の文化財

「浅鍛冶」を発見し、周辺の踏査の結果、「アサカゼ」に石塔が、「浅鍛冶」周辺に寺があったと推定した（大脇1993）。

飛鳥川の飛び石　『万葉集』巻11－2701に「明日香川　明日も渡らむ　石橋の　遠き心は思ほえぬかも」とある。現存する「飛び石」と万葉集に詠まれている石橋が同一のものかの確証はないが、稲渕集落には飛鳥川を対岸にわたる「飛び石」が残されている。飛び石は飛鳥産石英閃緑岩を８個程川中に並べ、石橋とする。また、稲渕の飛び石の他にも東橘の犬ケ瀬や祝戸など数カ所にも、近年まで残されていた。このような構造の石橋が飛鳥時代からあったことがわかる。

綱掛け神事　稲渕と栢森の集落では正月11日と祝日（成人の日）に綱掛け神事が行われている。稲渕の綱掛け神事は稲渕集落の下流のはずれで、男綱を川に掛けている。長さ70ｍにも及ぶ綱を編み、川の対岸から対岸まで渡している。その綱の中央に陽物を付ける。夕方には飛鳥坐神社の神主が赴いて、御幣を切って飛鳥川の上に掛け渡される。その後神事が営まれ、供え物は川に流される。一方、栢森の綱掛け神事は栢森集落の下流のはずれで、女綱を川に掛けている。綱と陰物ができると、川のたもとにある福石に括り、供養を備えてから住職による祈祷がとり行われる。その後、綱を川に渡している。

両村の綱掛け神事は、龍神（水神）のシンボルとしての綱であるという伝承があり、水神へ一年間の作物の豊饒と子孫繁栄を祈願し、その祈願の成就を予祝する行事としている。併せて、村境に綱を架けて、村内への悪霊・疫病の侵入を防ぐことが含まれている（奥野2007）。しかし、綱はいずれも集落の下流にあり、上流の理想郷からの福をここで受け止める意味ももつとされる（上野1997・野堀1987）。

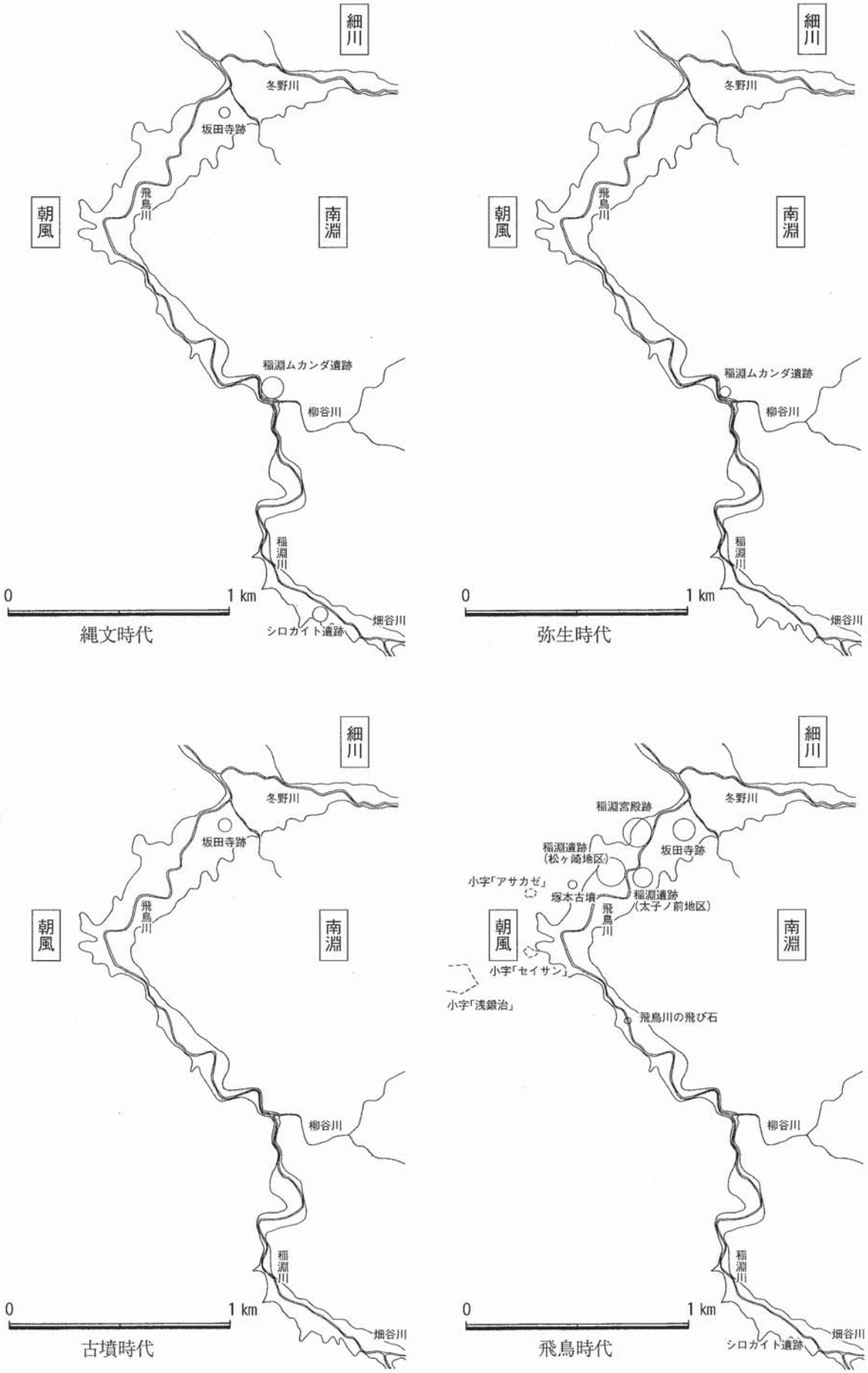
飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社　稲渕と栢森集落の間、飛鳥川右岸に「宮山」と称する小山がある。その中腹に式内社である飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社が坐している。ここは長い石段を登ると拝殿があるが、本殿はない。「宮山」の山が神体山となっている。現在の祭神は宇須多伎比賣命・神功皇后・応神天皇である。神社のすぐ下には飛鳥川が流れており、その露岩は長年にわたる速い流れで削られ、大きく渦を巻いている。そのため渦滝媛命という水の神が祀られたのであろう（和田2007）。なお、飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社の名称は『延喜式』によるものと推定されるが、中世末から近世を通じては「宇佐八幡」と呼ばれていたことが、御湯釜の紀年銘や『飛鳥旧跡考』などからわかる。

加夜奈留美命神社　飛鳥川右岸の栢森集落中程に式内社の加夜奈留美命神社が鎮座している。その社地は二筋の川に挟まれたところに位置し、絶えず川の瀬音「ナルミ」が響いていたことから、これを水の神として祀ったのであろう。現在の祭神は、加夜奈留美命である。加夜奈留美命は貞観元（859）年に飛鳥諸神では最高位の正四位下に授けられ、最も重視される。栢森には天文13（1544）年に談山神社の供御田がもうけられており、中世には多武峰の支配下にあった。この式内社は近世末には所在地が不明になっており、富岡鉄斎によって小字「堂の後」にある「葛神」と称される小祠に復興された（和田2007）。

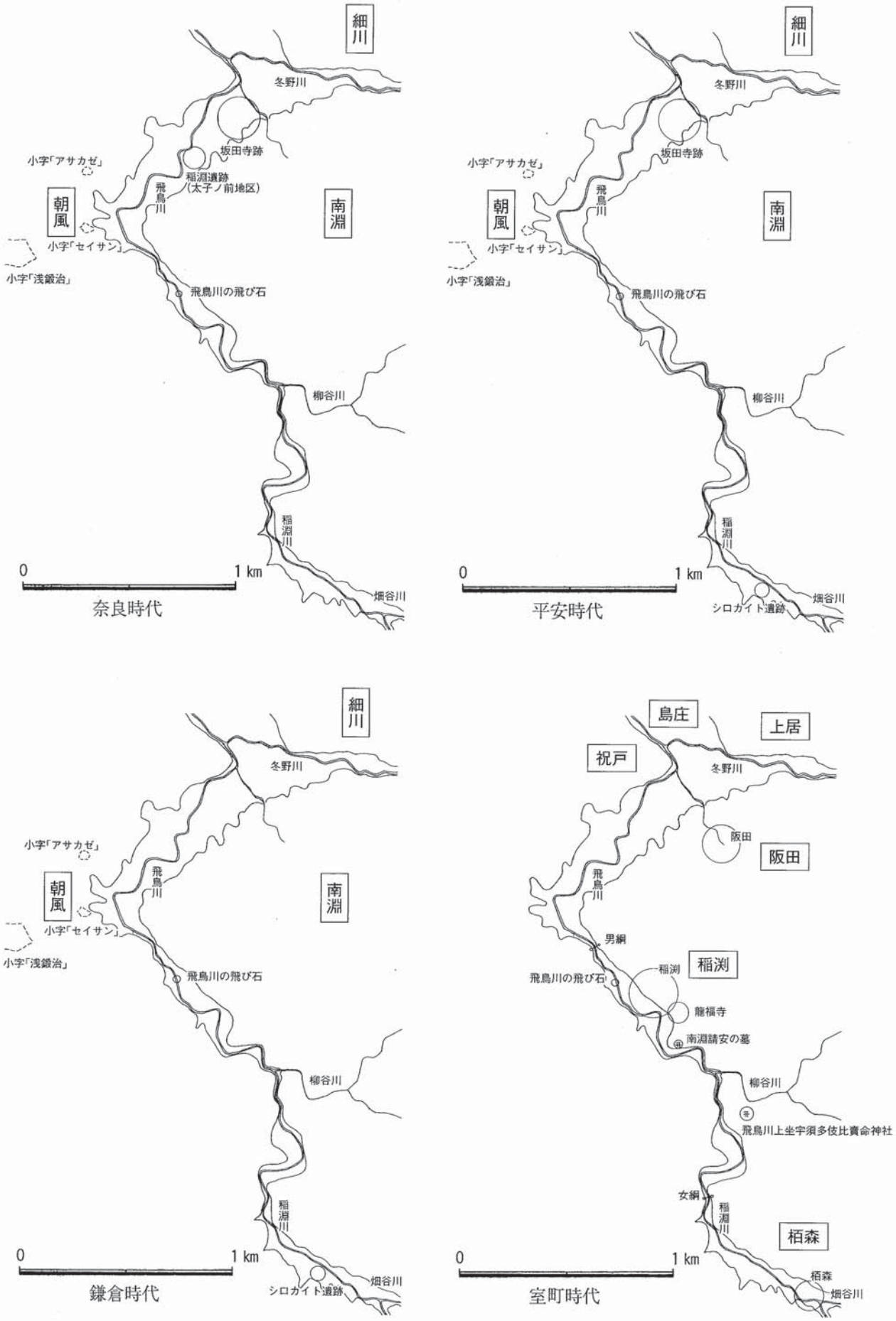
Ⅵ. 飛鳥川上流域の歴史的変遷

ここまでみてきた発掘調査の成果と残された文化財などから、奥飛鳥の歴史的な変遷を素描してみたい。

縄文時代　この地域の歴史を考古学的に語れるのは、縄文時代からである。それ以前は飛



第13図　奥飛鳥地域の変遷①



第14図　奥飛鳥地域の変遷②

鳥川上流域のみならず、明日香村内では確認されていない。その中で、飛鳥池遺跡や檜前脇田遺跡において、縄文時代草創期のサヌカイト製の有舌先尖器の出土がみられるが、他に遺構・遺物はなく、定住の可能性は低い（明日香村1988・水戸部・松村1999）。奥飛鳥で最初に人々の活動が確認されるのは、稲渕ムカンダ遺跡である。ここでは、縄文中期前葉の土器がみられる。しかし、その量は少量であるので、定住はまだみられない。また、シロカイト遺跡では中期後葉の土器が出土しているが、やはり出土量は少ない。この時期にはまだ、定住はしておらず、移動しながらの生活が続いていたと考えられる。奥飛鳥で確実に生活がみられるのは、後期初頭以降、晩期前半である。坂田寺跡でも後期中葉の土器が出土しているが、わずか１点だけである。この時期は飛鳥川中流域の飛鳥宮や大官大寺・島庄遺跡において住居や墓が確認されており、飛鳥川中流域では、ある程度の継続的な生活が考えられるが、奥飛鳥の稲渕ムカンダ遺跡では墓や焼土坑が確認され、生活の痕跡もみられる。ただしドングリの加熱加工を行っている遺構などからは、生活の時期は秋期に集中した生活が考えられ、山間部の果実や飛鳥川の淀みなどでの漁労を中心としていたのであろう（松田1997・山口2007）。

弥生時代　明日香村内においては当該期の遺構・遺物の分布は、飛鳥川中流域を中心として、一部檜前川流域にみられる（相原2007a・清岡2004）。現段階では橿原市四分遺跡・橿原遺跡を拠点に、小山地区・奥山地区・飛鳥地区・岡地区・島庄地区などで集落が想定できるが、奥飛鳥においては、縄文晩期以降の遺跡はみられない。この中で稲渕ムカンダ遺跡では遺構は確認されていないが、弥生時代の遺物包含層がみられるので、人々の活動があったことはわかるが、定住しているとは考えがたい。

古墳時代　古墳時代初頭も、この地域に遺跡はみられない。唯一、坂田寺跡で布留式の古式土師器の包含層があり、奥飛鳥の玄関口に生活の営みがあったことがわかる。その後、７世紀前半には塚本古墳が築造されるが、他に確実な古墳は確認されていない。

飛鳥時代　７世紀になると奥飛鳥での活動も活発になる。７世紀初頭に奥飛鳥の入口に坂田寺が創建される。その規模や伽藍については明確ではないが、瓦が出土しており、少なくとも藤原宮期までは造営の継続あるいは伽藍の補修がなされていたことがわかる。７世紀中頃になると坂田寺の対岸に飛鳥稲淵宮殿跡が造営される。これは宮殿の中枢部だけでなく周辺（稲淵遺跡松ケ崎地区）に付属施設が作られることから、比較的広範囲に広がっている。この宮殿は皇極前天皇や中大兄皇子などが、難波から引き上げてきた時に入った宮殿である。この宮殿も７世紀末までは管理されていた。また、稲淵遺跡太子ノ前地区では７世紀後半以降のバラス敷がみられ、飛鳥川沿岸に吉野行幸に関わる施設が展開していた可能性がある（相原2007b）。また、南淵請安の墳墓についても「朝風」の地にあったことが推定され、この地に未確認の終末期古墳が築造されていた可能性が高い。

奈良時代　８世紀の奈良時代になると稲淵宮殿は廃絶しているが、対岸の坂田寺では、８世紀前半に周辺を大規模に造成し、坂田寺を再建している。飛鳥時代の伽藍と奈良時代の伽藍との関係は明らかではなく、建て替えの理由についても不明である。しかし、奈良時代前半には金堂が建立されており、その後に回廊などが建築される。これらは東大寺の東脇侍を寄進した信勝尼が坂田寺に居住した時期と重なっており、奈良時代の坂田寺は信勝尼との関係で理解できる。さらに上流にある稲淵遺跡太子ノ前地区では８世紀中頃までの土器が多く出土しており、聖武天皇の吉野行幸の時期と重なる。一方、飛鳥川左岸の「朝風」の地には、長屋王家木簡によると、竹野王ゆかりの山寺「朝風廃寺」があり、竹野王石塔もこの地に建立されていた。

この石塔建立年代は天平勝宝３（751）年である。また『続日本紀』によると藤原田麻呂は蜷淵（南淵の別称）に天平14（742）年以降に別業を構えたことが記されるが、奥飛鳥のいずれの地であるのかは不明である。

平安時代　９世紀に入ると坂田寺以外、その動向は不鮮明である。９世紀前半、坂田寺では井戸の改修など伽藍の整備が行われ、まだ活発な宗教活動が行われていた。一方、栢森に近いシロカイト遺跡では、確実な遺構はないものの、平安前期の緑釉陶器が出土していることは注目される。

10世紀になると坂田寺はかなり荒廃していたが、10世紀後半には土砂崩れによって伽藍中心部は倒壊している。承安２（1172）年には多武峰の末寺になっていることから何らかの形で法灯は保たれていたと考えられるが、実態は明らかではない。一方、シロカイト遺跡では12世紀の建物が丘陵斜面から河川敷まで広がっていたが、12世紀末の洪水によって、河川敷ちかくの一部は埋没した。

鎌倉時代　この時期の奥飛鳥の実態も明確ではない。唯一、シロカイト遺跡ではこの時代の土器の出土があり、石敷が洪水後に施されていることから、まだ集落は継続していたと考えられるが、不明な点も多い。

室町時代　稲淵龍福寺のこの地での創建時期は明確ではないが、造成土から13～14世紀の土器が出土していることから、室町時代以降であることは確実である[5]。飛鳥地域の現集落での形成時期が室町時代であることが多いこと（相原2007b）から、稲渕集落の形成もこの頃からはじまる可能性がある。このことは、龍福寺の発掘成果やシロカイト遺跡の中世集落の廃絶が鎌倉時代で終わることとも符合する。また、綱掛神事の開始も中世末から近世にかけて宇佐八幡の修正会の一部として成立したとも考えられ（浦西1987）、集落の成立時期ともリンクしてくる。さらに、坂田寺は15世紀には水田になっていることがわかっており、阪田集落の移動も伺える。

江戸時代　関ヶ原合戦直後の飛鳥地域は本多俊政領になっており、寛永７（1630）年の「寛永七年高付大和国著聞記」では、すでに「入谷栢ノ森362.5石」「稲渕406石」「坂田341石」とあり、各集落が形成されていたことがわかる（橿考研1980a）。さらに正保２（1645）年には高取藩領の「入谷栢ノ森」から「入谷190.202石」と「栢森189.235石」が分村している。すでに江戸時代には、現在の集落は完成されており、以降、現在に至るまで、その景観が保たれているのである。

Ⅶ. 総括－奥飛鳥における文化的景観の形成－

奥飛鳥における遺跡や文化財を中心に、一部関連文献によりながら、飛鳥川上流域の歴史的な変遷をみてきた。しかし、蓄積されたデータが少なく、推測の部分も少なくはない。今後、この地域での考古学的な調査の進展によって、特に、朝風地域で発掘調査を実施することによって、より具体的な奥飛鳥の歴史像が描かれると思われる[6]が、今回は素描としてのアウトラインを示した。最後に、この地域がもつ文化的景観の形成についてまとめ、本稿の総括としたい。その視点としては、集落と農耕地の形成過程を中心にみたい。

奥飛鳥における居住地域の形成

奥明日香における人々の活動が確認されるのは、縄文中期前葉からである。その後、古墳時代まで断続的に生活の痕跡がみられるが、いずれも定住を示すものではなく、一時的なもので

安定した生活ではない。これは奥明日香が飛鳥中心部と比較しても両岸に山が迫り、狭隘な平坦地しかないことから、生産活動が山と川との関係にしかないことによると思われる。しかし、飛鳥時代になると坂田寺や稲淵宮殿跡（飛鳥川辺行宮）を造営するが、いずれも奥明日香の入口（北端）にあたる地域で、飛鳥中心部と密接な関係が考えられる。やや奥まった「朝風」の地には、考古学的にはまだ確認されていないが、南淵請安の邸宅や墳墓があった可能性がある。後にも記すように、現在の稲渕集落はまだ形成されておらず、「朝風」の地こそ現稲渕集落の前身になるものと考えられる。しかし、「朝風」も７世紀段階では大規模な集落を形成するものではなく、南淵請安の邸宅とこれにかかわる人々の数件がある程度であろう。また、飛鳥川沿いの芋峠は飛鳥と吉野を結ぶ重要な幹線道路であり、その沿線に形成される遺跡が稲淵遺跡（太子ノ前地区）などのように確認されているが、これとて集落として定住を示すものではない。奈良時代でも同様であるが、朝風には石塔が建てられ、朝風廃寺と仮称される山寺が建立された。そして藤原田麻呂の別業も南淵のいずこかに設けられていたが、朝風の地も有力な候補地である。この朝風廃寺を中心に、その後の集落が形成されていったと考えられ、それは「朝風千軒」と伝承されていることから、中世には一定の集落域が形成されていたのであろう。一方、栢森集落にちかいシロカイト遺跡では、平安時代初頭の遺物があり、規模は明らかではないが、その頃の生活が営まれていたことがわかる。さらに12世紀には確実に集落が営まれていたが、室町時代に現栢森集落に移る。同様に現稲渕集落も朝風から移ってくる。このような現象は飛鳥中心部でもみられることである。

奥飛鳥における耕作地の形成

奥明日香では縄文時代においても、定住ではなく一時的な居住であり、山や川において生業を営んでいた。弥生時代にも遺跡が少なく、よって、これにかかわる農耕地は確認出来ていない。少なくとも、大規模な水田・畑等による生産活動は、遺跡の状況や立地からみて困難であったと考えられる。飛鳥時代になると稲淵宮殿や坂田寺が造られる。また稲淵遺跡太子ノ前地区のように、飛鳥川沿岸の空間地にも施設がみられ、耕作地は少ない。なお、南淵請安の邸宅は特定出来ていないが、「朝風」にあった可能性が高く、朝風の地にも広範囲な耕作地は推定できない。また、天武紀５年の記事からは南淵山が樹木に覆われていることがわかり、『万葉集』では、飛鳥川の流れも急であることが推測できる。奈良時代には「朝風」に朝風廃寺が建立される。その周辺には、一部の農耕地が広がっていた可能性はある。その後「朝風」は、鎌倉時代には朝風千軒と呼ばれていたようである。この集落の周辺には水田などが想定され、同様に栢森のシロカイト遺跡周辺でも同様である。そして、集落が現集落地に移ると、朝風やシロカイトの地でも現在みられるような広範囲な耕作地に変貌していったと考えられる。

奥飛鳥の景観形成

奥飛鳥での居住地域・耕作地の形成過程をみてきた。この中で現在の景観はいかに位置づけられるのであろうか。それは現在の地に集落が形成される室町時代頃に直接の原型を求められよう。それまでは現在の棚田や農地の下に集落遺跡が確認・推定されており、今とは異なる景観をしていたことになる。その意味で稲渕棚田の形成時期は室町時代頃に求められ、一部は鎌倉時代の朝風集落の周囲に出来ていたと考えられる。飛鳥時代には、まだ大規模な集落や農地は想定し難い。その中で、飛鳥川上流域の飛鳥川の流れは、その地形や周囲の遺跡の状況から、現在と大きく変わっていないと考えられる。つまり『万葉集』に詠まれた景観が今なお、良く残されており、それは飛鳥川中流域の飛鳥中心部では、その景観が飛鳥時代とは大きく変貌し

ていることと比べても対照的である。

奥飛鳥における文化的景観の活用

このような稲渕の棚田であるが、水田が小さく、大型農耕機械が入れず耕作困難な土地であった。さらに地元の高齢化や後継者不足も相まって、荒廃水田と化していたのである。ここで平成８（1996）年に棚田オーナー制度が始まり、荒廃水田が蘇ってきたのである。さらにこの奥飛鳥には「棚田オーナー」（大字稲渕）のほかに、「阪田なるほど・ふぁーむ」（大字阪田）・「うまし酒オーナー」（大字阪田）などの生産活動が行われ、山からの恵みを利用した「森の手づくり塾」（大字栢森）も活動している。また、荒れた景観を蘇らせるために、「景観ボランティア」や「飛鳥川の原風景を取り戻す仲間の会」（大字栢森）が活動しており、景観の復元に励んでいる。さらに地元で生産された食材使った農産物で食事をだす「奥明日香さらら」（大字栢森）などがある。このように現在の活動は、奥飛鳥の自然と共生する方向に向かっており、まさに人々の営みと自然が共生した文化的景観といえる。

本稿を成すにあたっては、大脇潔・西光慎治・髙橋幸治・舘野和己・長谷川透・平松良雄・米川裕治の各氏から、調査成果や研究成果などのご教示・ご指導を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

（平成20年１月11日稿了）

註

1）『日本書紀』の読み下し文については、岩波書店刊行の『日本古典文学大系68　日本書紀　下』、『続日本紀』は『新日本古典文学大系12　続日本紀　五』による。

2）『万葉集』の読み下し文については、岩波書店刊行の『日本古典文学大系４　萬葉集　一～四』による。

3）「長屋王家木簡」の釈文については、奈良国立文化財研究所刊行の『平城京木簡一』『同二』及び、『平城宮発掘調査出土木簡概報21』『同23』『同25』『同27』『同28』による。

4）門脇禎二氏は「田身嶺」を現在の談山神社のある多武峰ではなく、飛鳥の東から南へ横たわる丘陵地とみ、そこにある多くの峰の一つとみる（門脇2005）。

5）龍福寺には平安後期と考えられる木造阿弥陀三尊像が安置されている。現地での創建が室町時代頃と推定すると、この仏像は朝風の地から遷されたものかもしれない。

6）奥飛鳥における考古学的な解明には、朝風地域と飛鳥川流域の発掘調査が必要である。特に、朝風地域では飛鳥時代の邸宅や墳墓、奈良時代の山寺、「朝風千軒」と称される中世集落の解明が必要である。また、飛鳥川に接した平坦面や栢森周辺の集落実態の解明が必要である。

参考・引用文献

相原嘉之2007ａ「弥生時代の明日香」『続明日香村史　上巻』明日香村

相原嘉之2007ｂ「飛鳥古京から明日香へ－飛鳥地域における歴史的風土の形成過程－」『明日香村文化財調査研究紀要　第６号』明日香村教育委員会

相原嘉之2008　「飛鳥と宮滝－飛鳥川をめぐる遺跡の諸相－」『季刊明日香風　第105号』飛鳥保存財団

明日香村教育委員会1988　「桧前・脇田遺跡」『明日香村遺跡調査概報　昭和62年度』

明日香村教育委員会1998　「1996－12次　坂田寺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成８年度』

明日香村教育委員会2000　「1998－16次　稲淵地内遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成10年度』

明日香村教育委員会2002　「2000－12次　稲淵地内遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成12年度』

明日香村教育委員会2004　「2002－４次　龍福寺の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成14年度』

明日香村教育委員会2005ａ「2003－14次　稲淵朝風遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成15年度』

明日香村教育委員会2005ｂ「2003－19次　稲淵遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成15年度』

安達厚三・木下正史1974　「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌　第60号第２巻』日本考古学会

浦西　勉1987　「宮座とムラの成立」『飛鳥の民俗』飛鳥保存財団

上野　誠1997　「結界の空間・飛鳥のオツナカケ」『古代日本の文芸空間－万葉挽歌と葬送儀礼－』雄山閣出版

大脇　潔1993　「朝風廃寺の再発見」『季刊明日香風　第48号』飛鳥保存財団

奥野義雄2007　「飛鳥の祭礼・年中行事」『続明日香村史　中巻』明日香村

門脇禎二2005　「『田身嶺』について」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会

国立歴史博物館1997『古代の碑－石に刻まれたメッセージ－』

清岡廣子2004　「明日香村域の弥生遺跡」『みずほ　第39号』大和弥生文化の会

関西大学文学部考古学研究室1987「稲淵ムカンダ遺跡発掘調査概報」『関西大学考古学研究紀要　第５号』

舘野和己1992　「長屋王家木簡の舞台」『日本史における国家と社会』思文閣出版

谷山正道2007　「近世の飛鳥」『続明日香村史　下巻』明日香村

奈良県立橿原考古学研究所1980ａ「飛鳥京跡関係史料集（１）近世地誌篇」『昭和53年度飛鳥京跡調査概報』

奈良県立橿原考古学研究所1980ｂ『大和国条里復原図』奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所1981ａ「飛鳥京跡関係史料集（３）近世地誌篇」『昭和55年度飛鳥京跡調査概報』

奈良県立橿原考古学研究所1981ｂ「飛鳥京跡関係史料集（４）近世地誌篇」『昭和56年度飛鳥京跡調査概報』

奈良県立橿原考古学研究所1983　「塚本古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1982年度』

奈良県立橿原考古学研究所2006　「飛鳥川2004・2005」『奈良県遺跡調査概報　2005年』

奈良県立橿原考古学研究所2007　「シロカイト遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2006年』

奈良国立文化財研究所1977　「飛鳥川西遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報７』

野堀正雄1987　「カンジョウカケ」『飛鳥の民俗』飛鳥保存財団

松田真一1997　『奈良県の縄文時代遺跡研究』奈良県立橿原考古学研究所

松田真一2008　「飛鳥川流域開発の歴史－飛鳥川に沿った原始・古代の遺跡から－」『季刊明日香風　第105号』飛鳥保存財団

水戸部秀樹・松村恵司1999　「飛鳥出土の二つの尖頭器」『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅰ』

山口卓也2007　「縄文時代の明日香」『続明日香村史　上巻』明日香村

和田萃・森和彦2007『図説飛鳥の古社を歩く－飛鳥・山辺の道－』河出書房新社

挿図出典

第１図：橿考研1983を転載

第２図：山口2007を転載

第３図：橿考研2007を転載

第４図：山口2007を転載

第５図：山口2007を転載

第６図：明日香村2002に加筆

第７図：奈文研1977を転載

第８図：明日香村2002を転載

第９図：明日香村2000を転載

第10図：明日香村2002を転載

第11図：橿考研1981ａ・1981ｂを転載

第12図：橿考研1980ｂに加筆

第13図：筆者作成

第14図：筆者作成